



人権教育は日々の生活の中から

帝京大学小学校 校長 石井 卓之

「フワフワ言葉（心が温くなる言葉）とチクチク言葉（心に突き刺さる言葉）」、小学校ではよく活用されます。模造紙に大きな木を描き、木の実を模した紙に友だちからかけてもらったフワフワ言葉を書き込み貼りつけていくという、言葉集めをしている学級をみかけます。

チクチク言葉は、日常の学校生活の中で、子どもたちが何気なく使っている言葉の中に潜んでいます。言葉を発した本人は友だちを傷つけるつもりがなくても、言われた相手は心を痛めるということがあります。授業中、教師に指名されて答えた子に対して、「えー…」、「違います。」と大声で言えば、次からその子は回答することがいやになったり、間違いを指摘されることを恐れて回答しなくなったりするのではないのでしょうか。

あだなもそうです。全てのあだなを否定するつもりはありませんが、相手がそのあだなで呼ばれることを望んでいるかどうか、そこが重要です。日常当たり前に呼ばれていても、本当はいやなのにそれが言えない子どもがいます。やめてほしいと言ってもやめてもらえず、あきらめてしまった子もいます。また、相手をばかにする意図を含んだ笑いも、言葉ではありませんが、チクチク言葉に類型化されると考えています。

一人一人が日常的に相手意識をもって言葉を使い、フワフワ言葉を増やすことで、学級や学校は温かい空気につつまれていきます。人権教育の第一歩です。

7年ほど前の話です。実業家でミス・ユニバースの九州代表の育成に関わっている方とお話をしたことがあります。それまで私は、ミス・ユニバースにあまりよい印象をもってはいませんでした（よく知らないのに、容姿で決める大会と勝手に思い込んでいました）。その方は、2015年に日本代表となり世界大会で6位となった宮本エリアナさんが、どのように成長していったかについて、熱く語ってくれました。

母親が日本人、父親がアフリカ系アメリカ人で、小学校時代は肌の色や縮れた髪のことでのじめを受け、トラウマを抱えていたそうです。自分に自信がもてず、ミス・ユニバースへの参加を依頼されたときも、直ぐには承諾をしてくれなかったそうです。しかし、ミス・ユニバースが単なる外見以上に内面や自信を磨くことで選ばれていくことを知り、自分を変えるチャンスにしたいと決心し、参加を承諾したとのことでした。

特に、世界大会に参加する人たちは「相手を蹴落として自分が選ばれよう。」とは考えていないこと、端からみると超競争社会に思えるが現実は違うということを教えてくれました。参加者は皆、「ライバルは自分」と考えて日々努力を重ね、人格・品格なしには頂点には上りつめられないそうです。また、ユニバースに選ばれる人の中には、エリアナさんと同じように小学校時代からのトラウマを抱え、外見にも自信をもっていない人が多いということも知りました。

エリアナさんは、2023年の春、WOWOWで初主演、初主役のドラマに挑戦するそうです。

以前、人権教育を専門とする先生から、「人権は水と空気のごとし」ということを教えていただきました。身の周りに当たり前のようにあるものだが、失われて初めてその重要さに気付く。だから、「日頃から人権感覚を磨き、自分の人権、相手の人権を大切にしていく必要がある」のだと。